九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

明治太政官制下における博物館の制度化 ： 「神代」および祭政一致思想との関係に注目して

高久，彩

https://hdl.handle.net/2324/5068285

出版情報：Kyushu University, 2022, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

（様式６－２）

氏　　名	高久　彩
論　文　名	明治太政官制下における博物館の制度化 ―「神代」および祭政一致思想との関係に注目して―
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　中野　等 副　査　　九州大学　　名誉教授　　古谷　嘉章 副　査　　九州大学　　名誉教授　　高野　信治 副　査　　京都大学　　教授　　高木　博志 副　査　　東京芸術大学　　教授　　佐藤　道信

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、明治初期の太政官制（内閣制度に先行する政体）のもとにおける東京国立博物館の前身にあたる「博物館」を対象に、その歴史的特色とその前提をなす明治国家の国家観を解明したものである。西洋近代において、ミュージアムの公共性は、政教分離が行われ世俗化がなされて成り立つと言われてきた。しかし、日本の「博物館」では、「神代」から続く天皇の“歴史”が重要な地位を占め、根底には太政官が主導した祭政一致の思想との関わりがみられる。研究の動機となる問題意識は、こうした日本の博物館における特色の究明にあった。

第一章・第二章からなる第一部では、「博物館」の列品（収蔵品）分類の秩序化の過程に注目し、博物館資料のなかで歴史と美術が重要視されていく過程を追い、明治国家が実現しようとした祭政一致の具現化に重なることを明らかにした。第三章・第四章の第二部では、博物館の列品秩序化を支えた明治国家の目指した「復古」の観念とその歴史観を明確にした。具体的には、国家儀礼の場で祭政一致思想が可視化されるという観点から、明治天皇の「御即位の大礼」と「大嘗会」という儀礼に注目して、そこでの祭器の位置づけや役割などを分析した。最後の第三部は、第五章から第八章までとなる。ここでは初期明治国家が目指した歴史像が「博物館」でどのように具現化されたのかを分析する。そこで貫かれている主張は万世一系の天皇という観念が、古記旧物などによって視角化されていくというものであり、そこで特徴的なことは所謂科学的手法・関心が退けられ、神代からつづく日本の祭政一致の国体の視角化が優先されたことが明確となった。終章では、太政官制下における博物館の制度化は、「もの」を通じて民衆教育を進めていくという西洋近代における博物館の手法を最大限活用しつつ、そのメッセージは太政官政府の志向する祭政一致を理念であり、結果博物館が天皇の神聖化および天皇制イデオロギー形成の一翼を担っていたと結論づけている。

公開審査・最終試験においては、論文調査委員の質問に対して真摯かつ論理的に回答し、その対応は調査委員を充分に満足させるものであった。委員各位は、史料操作が非常に合理的であり、本人の高い研究能力が充分に証明されたと判断した。とりわけ、本論文において実証された「博物館」の意義、すなわち太政官制下の「博物館」が獲得した万世一系の歴史を視角化するという機能については、従前の博物館史や美術史で触れられたことのない非常に重要に新知見であるとされた。また、帝室博物館へと続いていく「博物館」政策において、これまでは伊藤博文が主導してきたと理

解されてきたが、実はそれに先行するかたちで大久保利通が道筋をつけていたという指摘は、日本近代史研究の上でも有益なものであると高く評価された。審査委員会の総意として、本論文が博士（学術）の学位に値すると判断した。